

「インフォコム 2013」の開催結果について

平成25年6月4日

一般社団法人 日本原子力産業協会

当協会は第46回原産年次大会のサイドイベントとして、4月25日、「原子力広報関係者連絡会—インフォコム 2013」を開催した。年次大会でも講演した英国インペリアル・カレッジ・ロンドンのG.トーマス教授からのリスクコミュニケーションをめぐる講演とともに、原子力広報関係者が今後の広報を考える上で参考となる情報共有・意見交換が行われた。

G.トーマス氏講演のポイント

- 100%安全と言うと、問題が発生した場合、非常に深刻な問題に発展してしまう。
- 容認されやすいリスクとは、
 - ・自分（個人）が管理できるリスク（車の運転に絡むリスクなど）
 - ・メリットのあるリスク（英国では、原子力発電のメリットを提示している）
 - ・自然由来のリスク（津波など自然災害のリスク）など
- リスクコミュニケーションには、多様なニーズがある。以下を行うことが重要。
 - ・人々が何を心配しているかに耳を傾ける。
 - ・リスクを効果的に監視していることを伝える。
 - ・時間の経過とともにリスクがどのように変化するかを分かるようにする。
 - ・一般市民に平等なパートナーとして、計画を立て、やり方を改善していくことに参加してもらう。
- 信頼できる情報源として、独立性のあるオープンで正直な科学者を起用することが必要。
- 英国では、様々な専門分野の科学者が同じメッセージを明確に伝えたことが効を奏した。
- 避難についてどういう対応が望ましいか聞くことが将来への道筋をつける意味で必要かもしれない。
- 一般市民の人たちに意思決定のプロセスに参加してもらい、様々なエネルギーのメリット・デメリットについて話し合う。そのことで、リスクについての理解が進み、リスクを受け入れやすくなる。
- 放射線量の制限値についてきちんと議論することを提案したい。正しい判断をしなければならない。

意見交換

Q1：メディアに事実を提供してもらうために、具体的に行われた活動の例は？

A1：福島第一の事故が起き、放射線が関心を集めるようになった際には、BBCに明確な情報を発信したいという科学者が数人集まって、BBCに働きかけを行った。また、視聴者から信頼されているジャーナリストが担当しているラジオ番組で、色々な分野の科学者が同じ一貫したメッセージを発信した。

Q2：ネガティブな発言をする科学者の方が国民に受け入れられてしまう傾向にある。英国ではどうか？

A2：英国には、チーフ・サイエンティストという制度があり、政府に対して科学的なアドバイスを行う。時には政府に反対意見を言うこともある。そういう経緯から、独立性があると認められている。その科学者が我々を支持してくれた。正しいことを適切な科学者が伝えることが重要。

Q3：日本は、科学リテラシーが少ないと感じる。英国での科学リテラシー教育は？

A3：メディアも非常に重要な役割を果たす。英国では、多くの子供向けの科学番組があり、例えば、若くてセクシーな物理学者をプレゼンターとして起用して科学への関心を高めることに成功している。全ての大学には、地域の人たちにデモンストレーション活動するアウトリーチプログラムがあり、コミュニケーションに役立っている。研究予算においても、一般市民と科学についてどのようにコミュニケーションを図るのかについても記載する義務が設けられている。

以上